

アーティストインタビュー

石垣政裕さん

—まず、子どもの頃、どんな子どもだったかな、どんな遊びをしていたかな。

石垣：1日中遊び呆けていましたからね。通り一遍のことは全部やりましたね。

—どんな子どもだったか？

石垣：そうですね。両親が両方とも働きに出たので、1人で近所の走り使いをやっては小遣いを稼いだり。だいたい、年上の人と結構一緒に遊んでたので、割とませたガキでした。

—そうだったんですね。お芝居を始めるきっかけとか。いつ頃から始めたとか。

石垣：高校に入った時に、最初演劇部に入ったんですね。ちょっと演劇部、1公演ぐらいやったんですけど、なんかやっぱりかったるい気がして。そんな議論なんかなくていいんじゃないかなっていうので、運動部に入ったんですね。ただ、演劇はなんか面白そうだなっていうのがあったので、季節劇団員って言って、運動部がちょっとオフになると演劇部に行っってはお手伝いして役者になってたりなんかしてたんです。

—じゃあ、ずっと運動部に移ってからも、運動部1本ではなく、お芝居も演劇部もやりつつ。

石垣：季節で変わってやるみたいな。自分自身としては季節劇団員（笑）。

—そうなんですね。そのあとは？

石垣：そのあとは大学に入って、暇だったら手伝いに来てって、市民劇団、今の劇団なんですけど、仙台小劇場なんですけど、そこから手伝ってくれって言われて。じゃあいいですよ、俺も暇だからって、まだ大学も何も分かんないのに返事

してしまったもので、行かざるを得なくなったっていう、それがきっかけですね。

—でも高校生で演劇部に入ろうっていうふうな気持ちになったのは、何か。

石垣：そうですね。姉が演劇をやったりなんかしてたので、そういうのもあるんだなっていうふうな感じですね。特に演劇が好きだっていうわけでもなくて。

—なくて、部活として。

石垣：そうです、はい。

—やってみようかなぐらいに。

石垣：ええ。当時、今、演劇鑑賞会になってますけど労演っていう組織があって、仙台にプロの劇団が上演してたので、それを観に行ったりなんかして、こういうのもあるんだと思ったぐらいです。

—大学生になってから、今の劇団に、所属される。

石垣：最初は手伝いですね。で、だんだんだんだんのめり込んでいくというか。なにしろ、今までは高校だけやってて、そういう市民の劇団に入ったので、ちょっとやっぱり違う雰囲気なので。年上に混じって遊んでた政弘ちゃんは、そういうところの匂いを嗅ぎつけて、これ入ったほうがいいかなと思ったんです。

—最初、公演のペースってどれぐらい？

石垣：最初は春、秋の2公演みたいな感じですね。

—その当時って、どれぐらい仙台では、劇団とか。

石垣：そうですね。3つあったかなって感じですよ。

—それはお芝居をしようかなって思ったら、そのどれかに入るっていう。

石垣：そうですね。大学とかのそういうところの劇団っていうか、愛好会なんかはあったんですけど、市民劇団とすればそう多くはなかったですね。

—そのあとも、特にお芝居と離れたりはせずずっと関わっている？

石垣：そうですね。なにしろ、大学が授業があんまりなかったの。うちを出て大学に行って様子を見て、すぐハンドボールをやりに行って、そして夜は劇団に行ってる、この三角食べみたいなことをやってたんですよ。

—ハンドボールは。

石垣：ハンドボールは、今でも高校のコーチをやっていますけど。

—それもずっと続けて。

石垣：それもずっと続けているというか、三角食べがそのまま大人になったと。

—何か大きな、歳を重ねるごとにあるお芝居から、例えば就職してからとか、あとは子どもができてからとかあると思うんですけども、そういうような節目になるような出来事とかってというのは？

石垣：そうですね。演劇はずっとそのままやってきたので、結婚するのも劇団員同士で結婚していますし、子どもが生まれても、子どもも連れて稽古場に行っていましたので、もう生活そのものが演劇という形になってましたね。

—それはたぶん、その時から、それは自然なことみたいな感じですかね？

石垣：どうでしょうかね。ほかの生活を知らなかったの（笑）。

—特に何か葛藤することもなく？

石垣：そうですね。

—ほかの劇団員の方も子ども連れてくるとかっていうこともありました？

石垣：それはありました。今やれば同窓会みたいな感じで。子ども劇場っていうのを実はやってたんですね。毎年夏に。で、子どもたちもそれに子役で出演したので。

—特に続けようか辞めようかみたいなものは全くなく。ずってという感じで。

石垣：そうですね。一度外国で暮らした時は、随分もう離れてしまったので。また次にやるかどうかかっていうことは考えましたけれども。でもやっぱり帰ってくると、すぐなじんでしまいましたね。

大河原：ご自身の活動と劇団が、これからどういうふうになっていったらいいなっていう展望だとか、あとは仙台においてどうあったらいいなっていう今の思いを少しお聞かせいただけますか。

石垣：劇団はとにかく、地域の物語を創り続ける。それを持って海外でもいろんなところで上演したいっていうところがあります。そういうスキルをちゃんと身につけていくっていうことが大切かなと思いますね。私自身とすれば、早く仕事を辞めて演劇に没頭したいと毎日思っているわけですけど。どれだけこれから作品が書けるかどうか分からないし、どれだけ演出ができるか分かりませんが、自分が本当に納得できるようなものができるかどうかっていうのもちょっと不安ではありますけども、とにかくやれるまでやっというふうに思います。若い頃は、俺は太く短く生きるんだって言ってたんですけど、こんなに長くなってしまうとは。身を細めないようにしなきゃいけないなっていうふうに思うんですけど。

大河原：なんか、さっきも話をされていて、上の世代の演劇人が割と過激であった

こととか、割と偏見であったりとか仲間意識だったりとかいろんなことがあって、それに対して、石垣さん、嫌だったんだらうなって思っちゃったんですよ、僕。なんか、変な話、地元でね、一番と言われた高校出て、地元で一番と言われた大学出て、大学で教えてるとか研究職やってて演劇やってるっていうのに対して、面白く思う人は1人もいなかったと思うんですね。それに対して。

石垣：はい。いろんなところに壁がもう作られたっていうのはありますけど。

大河原：それは1つ前に文月さんが、「私が子どもを生んで育てたのがたぶん最初だ」って言ったんですよ。演劇人は子供なんか作らないし考えないっていうのが。でも石垣さんは自分のところの劇団で結婚したし子どもも作ったし。たぶん、みんな生活なんか考えずに演劇やってるけど、石垣さんは割とちゃんとお給料をおうちに納めていたし、子どもをちゃんと育てていたと思うんですよ。たぶん今のスタンダードなんですよ。50年早かったんですよ。たぶん、今われわれは、本当に夕方までに帰れるようにしようねってなってるし、演劇人としてちゃんと権利であったりとか労働環境をやっと考える時代に入ったけど、石垣さんの時代ってたぶんそうじゃなかったと思うし。それに対して、いわゆるどこの誰とは言わなくてももちろん結構ですけど、地元の劇団に対してあまりいい思いをしてなかったんじゃないかなと邪推したんですよ。一高の後輩は。それはどうですか？

石垣：それほどほかの劇団知らなかったの。それが幸いしたのかなっていうところもあると思うんですけど。だから、全国のいろんな人たちと話をすると、そういう人たちがたくさん出てくるんですね。へえーそうか。この間、弘前の取材をした時もそうだったんですけども、すごく口角、泡を飛ばして議論するような人がいて、は一すごいなって私は見てただけですけど。だから、それとは違うやり方もあるかなって感じもしてて。演劇もやって、仕事もしてってことになる、あいつはそういうやつだってレッテル貼られますからね。で、特に新聞なんか出るとね、「あいつはどういう、本当に仕事やってんのか」って言われるから、そうすると背中に「仕事やってます」みたいなTシャツ着て、仕事やらないといけないみたいなところがあるんですよ。でもそういうのは違うんじゃないかって、演劇やっててもやることはやるよという反発はありましたよね。反発が

強いだけに、また向こうの反発も大きいみたいなところもあったり。でもそれはそれで、今思うと、あって良かったのかなって感じがします。みんな同じようにいく生活じゃなかったからこそ、自分のポケットも増えたし。そういうのって演劇だけではないんですけど、自分のポケットどう増やすかってそのところがやっぱり演劇をやったおかげでいろんな経験を積むことができたっていうところが。あったと思うんですね。本当にほかの人ってあんまり知らないですね。ほかの劇団やったことないので。

大河原：そうですね。楽楽楽ホールで公演をしている劇団を僕は逆にあまり知らないぐらいなので。本当にすごくなにか、並走してるというか（笑）。

石垣：（笑）。

大河原：なんかあとは、思ったのは、なんだろうな。たぶん、演劇を手放せるタイミングはいくらでもあったはずなんですよね。いろんなことやってらっしゃるでしょうし。だけど、手放さなかった最大の理由ってなんなんですか？

石垣：やっぱり心を動かされるっていうのは変ですけど、いろんな人と付き合ってる時に、自分が心を動かされる人ってやっぱり演劇やってる人なんですよね。いろんな人と付き合いますでしょ。いろんなところで、名刺がこんなに溜まってあるんですけど。でもやっぱり心動いてそうだよねと、それ違う、違うよって言うことも含めてね、やっぱりそういう違う生き方、違う文化みたいなのも持っている人って、演劇やってる人だって私思いますので。そこはちょっと音楽なんかとも違うなど。音楽だとバンドやってる人はそれなりの考えがあるんですけど。そういう楽しみ、今で言えば楽しみになるんですけど、それが自分が生きていくエネルギーになってるんじゃないかなって感じがすごくしてるんですね。

大河原：何歳まで現役でいたいですか？

石垣：あと10年ですね。あと10年どうやって。毎日ジョギングしながら考えてますよ（笑）。

—10年以上は。10年以上現役いけそうですね。

大河原：10年じゃだって、やり尽くせないですね。

石垣：本当にうちの書庫に入ってる本をみんなやりたいと思って。みんなそれなりにテーマを決めて集めてるんですけど。でもこれやりきれるのかなと思ったら、地震で崩れちゃったしね（笑）。

大河原：楽しい話たくさん聞けて最高でした。じゃあ、ありがとうございます。